

## 【会長賞②：中学生の部】

### 「思いやりの溢れる社会へ」

東京都・東京都板橋区立赤塚第三中学校

3年 小宮山 由佳 さん

私は障がいを持つ人を「障がい者」という枠でくくる必要はないと思う。なぜなら、私達と同じように得手、不得手があるだけだと考えるからだ。

私の幼い頃からの知り合いに、自閉症を持つ男の子がいる。言葉を話すのは難しいが、身振り手振りで会話することはできる。私は彼の家族から聞く話にいつも驚かされている。特に印象的だったのは、彼が家族と出かけた時の話だ。彼は一度歩いた道は決して忘れないらしい。その為、一度しか歩いたことのない道を家族よりも先にどンドン歩いていってしまい、一人で目的地に着いていたそう。

私はこの話を聞いてとても驚いた。私だったら途中で道に迷い、迷子になってしまうだろう。でも、彼はそれができた。障がいがない人よりもある人の方が得意なことがあるのだと、私はこの話から学んだ。

私が障がいを持つ人と関わる機会是他にもある。

私が所属するボランティア部の活動の一つに、福祉園が開催する納涼祭のボランティアがある。私は初めてボランティアに参加したとき、とても緊張した。自閉症の男の子との関わりはあるものの、初めて顔を合わせる障がいの人とどのように接すれば良いのか、わからなくなってしまったのだ。でも、一緒にボランティアをした大学生は、そんな私とは違った。福祉園の利用者さんのことを名前で呼び、積極的に声をかけていた。それを見て、何か特別なことをするのではなく、ただ丁寧に教えてあげることが大切なのだとわかった。

それからは自分から積極的に声をかけるよう心がけることで、利用者さんとのコミュニケーションがだんだん取れるようになっていった。ゲームのやり方を教えると

「ありがとう。」

と返してくれたり、名前を覚えてくれたり、  
帰り際に

「さようなら。」

と声をかけてくれた利用者さんもいた。そんなつながりがとても嬉しく、今でも心に残っている。

私は初めは利用者さんと接することに緊張したが、ボランティアをしているうちに、緊張がすーっと消えていくのがわかった。障がいを持ち苦手なことはあっても、私達と何も変わらないのだと改めて気づくことができた。

障がいのない人にも人より苦手なものはある。どんなに頑張っても他の人より足が遅い人や、勉強が苦手な人もいるだろう。障がいを持つ人もそれと同じように、苦手な部分があるだけなのだ。

しかし、今の社会はどうだろうか。障がいのある人に対し、冷たい視線が向けられるのをよく目にする。「ふざけているわけではないのに」「精一杯やっているのに」と物凄く傷つくだろう。だから、そんな社会を変えていかなければならない。

では、どうすれば良いのだろうか。

もし、町で障がいを持つ人が困っていたら手助けをする。これが、私達が一番にできることだと思う。一生懸命頑張っているのだから、笑ったり、見て見ぬふりをしたりしないでほしい。

そして、障がいを持つ人達の良いところを、一人一人見つけていくことだ。人には良いところが必ずある。それは障がいを持つ人も同じだ。また、特技も人それぞれある。私の知り合いのあの男の子のように、普通の人より優れた特技を持つ人もいる。そういった一人一人の個性を認めることが大切だ。

こうした努力が心の壁をなくし、思いやりの溢れる社会へ変えていけると私は思う。